

平成29年1月13日

平成28年度三学期始業式 あいさつ

校長 今井 智幸

生徒の皆さん、「凍裂」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。「凍」は、凍結の「凍」、二水に凍、「凍える」、「裂」は、亀裂の「裂」、「裂ける」です。

「凍裂」は、大木が凍結して、弾けるように裂けることを意味します。摂氏零下25度で起きます。過酷ともいえる冬の厳しい寒さが支配する静寂な森の中で、トドマツなどは、「バチーン」と澄んだ音を森中に響き渡らせるそうです。痛々しい縦状の傷跡が残りますが、トドマツにとって「凍裂」は致命傷にはならず、まるで痛々しい傷跡をたくましきの勲章とするかのように、苛烈な自然の中を生き抜いていきます。

本来、温暖な地域に育つ常緑樹の楠木は、降雪によって葉に雪が降り積もり、その重みに耐えられない時、枝の付け根が裂けるように折れてしまうことがあります。見た目にも痛々しい姿になりますが、雪による枝折れは、厳しい自然を生き抜いていくためには折り込み済み、春には傷口から新しい枝を芽吹かせます。

そして、桜。桜は、実にこまやかで、計画性や自己規制があり、自然と無理なく同調する性質をもっている落葉樹です。夏に、翌年の春に咲かせるつぼみの準備をし、地球の周期、つまり日照を利用して花が咲き出さないよう休眠スイッチを入れます。逆に、冬はその寒さに耐えているように見えますが、実は、真冬の厳しい寒さによって、目を覚まします。まるで厳冬の滝行のように、厳しい寒さに打たれ、自己を覚醒させるのです。そして、ここ角館では今は純白の雪に覆われた武家屋敷の桜も、春にはその温かさに歩調を合わせるかのように淡いピンクの花を咲かせます。

明日からセンター試験を受験する3年生の皆さんに、昨日のある全国紙の新聞記事「受験 頑張って君見てるー先輩からのメッセージ」の中から、シカゴ・カブスの上原浩治さんのメッセージを紹介します。上原さんは、皆さんも知っているように、2013年抑え投手として米大リーグ・レッドソックスの世界一に貢献。今季からはカブスに所属。大阪出身。厳しい環境と挫折を乗り越え、まさにトドマツのような魅力ある生き方を貫いている野球選手です。

「不安だから努力」今も

体育教師になりたかったので、高校生の時は大阪体育大学を受験しました。結果は推薦入試、一般入試ともに連敗。予備校で中学校レベルの勉強からやり直しました。

勉強は相当嫌いだった。全部が嫌いな科目。「何でこんなことしないとあかんねん」って思っちゃう。特につらかったのは、大学に進学した同級生がスポーツで活躍するニュースを見た時。「自分は何やってるんやろ」と不安になりました。

大学に早く受かりたいと思って一段飛ばしできない。コツコツ勉強して大阪体育大学に合格しました。40歳を過ぎて野球が続けられるのも、浪人した1年があったから。忍耐力がついたんだと思います。

巨人時代から背番号はずっと19。これは「浪人した19歳を忘れないように」という意味。結果が出ない時にふと19番を見ると、「野球ができなかったあの時と比べれば、打たれようが野球ができています」。自分の原点に戻れるんです。

受験生にとって、今は不安な時期。僕も今季のプレーについては、不安が大きい。でも不安だから練習する。受験も同じです。最終的になるようにしかならないと思って、努力するしかない。一生懸命努力したやつのことを神様はきっと見ています。（朝日新聞、平成29年1月12日掲載）

将来、屋根の最も重要な棟と梁となる「若杉」に喩えられ、過酷な環境の高山で美しい花を咲かせる「駒草」と見られる角高生の皆さん。

大自然中で凛と生き抜く樹木のように、たとえ厳しい冬の環境の中にあっても、一人ひとりがたくましく、やわらかく、かつ、自己規制をもつ、すぐれた「若杉」、「駒草」になることを期待します。

3年生の受験生の皆さん、苦しさを乗り越えた経験は、必ず未来に生きます。過酷な寒さによってこそ自己を覚醒させる桜のように、受験という厳しい冬の時期を乗り越え、春の喜びの花を咲かせるよう、悔いのない健闘を祈っています。